令和８年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

(1)　学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。

(2)　各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。

(3)　区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1　調 査 日　令和８年４月１４日（火）

2　調査対象　品川区立学校　第２～９学年の全児童・生徒

3　調査内容

教科に関する調査

→　調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第２・３学年>　国語、算数
<第４～５学年>　国語、社会、算数、理科
<第　６　学年>　国語、社会、算数、理科、英語
<第７～９学年>　国語、社会、数学、理科、英語

品川区立伊藤小学校

令和８年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（国語）

１　国語の定着状況についての概要

５学年中４学年の校内平均正答率が目標値を上回った。しかし、学年ごとに課題が見られた。具体的な課題を以下に記す。

２　具体的な課題

第２学年…多くの項目で目標値や全国平均正答率、区平均正答率をおおむね上回った。しかし「漢字を書く」では、目標値、全国正答率共に下回った。漢字の読み取りは定着しているが、漢字の書き取りの習得が課題である。

第３学年…「おれいの手紙を書く」及び「文しょうを書く」の正答率が目標値に対して大きく下回った。既習の内容を用いて選択肢を選んだり、自分の考えを書き表したりする力が課題である。

第４学年…文章の組み立ての正答率が目標値を大きく下回った。また、漢字を使わずに文章を構成している児童が多かった。漢字の定着及び文章に表す力が課題である。

第５学年…「自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして文章を書く」「自分の考えを明確にして文章を書く」問題の正答率が目標値を下回った。また、記述問題の無回答率が非常に高く、自分の考えを文章で表現することが課題である。

第６学年…多くの項目で目標値や全国平均正答率、区平均正答率を上回った。しかし「漢字を書く」では、目標値を下回った。前学年までの漢字の定着が課題である。

３　課題の原因として考えられること

第２学年…既習の漢字の定着が低く、活用できていないこと。また、ペーパーテスト等の書き取り問題で、とめ・はね・はらい及び送り仮名の問題の正答率が低いこと。

第３学年…「書くこと」で設問に正対した答えを導き出す力や題意を捉える力が不十分であること。また、既習の漢字の定着が不十分であること。

第４学年…既習の漢字の定着が不十分であり、記述問題で既習の漢字を使えていないこと。

第５学年…自分の考えを整理し、理由や事例と関連付けながら文章を構成する力が十分に身に付いていないこと。また、設問の意図を捉え、条件に沿って書く経験の不足やそれに伴う文章を書くことへの自信が不足していること。

第６学年…第５学年までに習ったの漢字の定着が不十分であり、活用できていないこと。

４　課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

第２学年…文章を書く時間を増やせるよう、家庭学習を設定する。また定期的に漢字小テストを行うことで、継続的な学習による漢字の定着を図る。

第３学年…観察カードや自主学習を定期的に取り組ませ、文章表現に慣れさせる。また、繰り返し書く時間を設定し、家庭学習を含めて反復させることで漢字の定着を図る。

第４学年…文章を書く学習では手本を用意し、基本に立ち返って書ける手立てとする。また、漢字学習ノート「ことのは」を活用し、反復練習による漢字の定着を図る。

第５学年…文章を書く活動を継続的に取り入れ、自分の考えと理由を結び付けて表現する機会を増やす。また、意見文を定期的に書く活動を設定し、構成を意識して文章を書く力の育成と無回答率の改善を図る。

第６学年…タブレットでプロットを書く活動は継続しつつ、ノート等に実際に書く活動を増やすことで、既習の漢字を使って自分の考えを文章化できるようにする。また、定期的に漢字小テストを行い、継続的な漢字の定着を図る。

令和８年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（社会）

１　社会の定着状況についての概要

各学年の校内平均正答率について、第４学年は全国平均及び区平均をおおむね上回った。第５学年は全国平均を非常に大きく上回り、区平均も上回った。第６学年は全国平均を上回ったが、区平均とは同程度であった。

２　具体的な課題

第４学年…領域別正答率は概ね目標値を上回った。しかし、「工場の仕事」の観点で目標値を非常に大きく下回った。資料を活用した問題の正答率が課題である。

第５学年…領域別正答率は概ね目標値と同等だったが、問題の内容別では「ごみのしょりと利用」における校内正答率と目標値との差が最も大きかった点が課題である。

第６学年…領域別正答率は全て目標値を上回った。しかし、「国土の自然環境と国民生活」の問題で、目標値に対する正答率が前年度よりわずかに下回った点が課題である。

３　課題の原因として考えられること

第４学年…地図を読み取る力や、工場の仕事の行程、スーパーマーケットで働く人の工夫について資料を読み取る力が十分ではないこと。

第５学年…言葉の定義や、正しい名称を覚えていない児童が一定数いること。日常生活の場面を想起して考える力や資料を読み取る力が十分ではないこと。

第６学年…メディアの特徴について理解や公害の原因、また、森林の働きや日本の漁港と水揚げ量などの資料を比較する力、読み取る力が十分ではないこと。

４　課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

第４学年…地図記号に慣れ親しむことができるよう、授業で地図帳を活用する。また、教科書等の資料を基に考えを述べる活動を多く取り入れる。

第５学年…単元ごとでなく１時間ごとに復習や小テストの時間を設定する。既習の言葉のインプット・アウトプットを繰り返すことにより、基礎知識の定着を図る。

第６学年…タブレットや小テストを用いて、今後も知識の定着を図る。また、資料を根拠にして自分の考えを記述したり比較したり、資料に書き込んだりする学習を繰り返し行うことで、資料を読み取る力を身に付けさせる。

令和８年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（算数）

１　算数の定着状況についての概要

全学年において平均正答率が目標値に対し上回る又は同程度となった。おおむね良好である。

２　具体的な課題

第２学年…全領域で正答率が目標値を上回った一方、繰り下がりのあるひき算の考え方を説明する問題は目標値を大きく下回ったことが課題である。

第３学年…領域別正答率では、４領域中３領域で目標値を下回ったこと。設問ごとに見た場合、直角三角形の特徴に関する問題において、目標値を大きく下回ったことが課題である。

第４学年…領域別正答率では、４領域中３領域で目標値を上回ったが、図形領域が目標値を下回ったこと。設問ごとに見た場合、あまりのあるわり算における文章題において目標値を大きく下回ったことが課題である。

第５学年…領域別正答率では、４領域中３領域で目標値を上回ったが、図形領域が目標値を僅かながら下回ったこと。設問ごとに見た場合、身近なもののおよその面積を推測する問題及び平行四辺形の作図の問題において目標値を大きく下回ったことが課題である。

第６学年…全領域で正答率が目標値を十分に上回った一方、グラフから導き出した結論の妥当性について考察し、説明する１題のみ目標値をごく僅かながら下回ったことが課題である。

３　課題の原因として考えられること

第２学年…繰り下がりのあるひき算の仕組の理解が十分ではないこと。一つ一つの数の処理について訳を考えたり説明したりする活動が十分ではないこと。

第３学年…図形を観察したり操作したりしながら図形の特徴を捉える活動や、既習の知識を活用して問題を解決したりする経験が十分でないこと。

第４学年…図形を観察したり操作したりする活動や、問題場面を図式化したり式の意味について考えたり対話したりする活動が十分ではないこと。

第５学年…長さや広さについての量の感覚を育む活動や、三角形や四角形などの作図の活動が十分ではないこと。

第６学年…グラフを作成した後に、その特徴や傾向を把握したり、結論付けたり、その結論の妥当性について批判的に考察したりする活動が十分ではないこと。

４　課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

第２学年…ひき算を行う際に、形式的な処理だけを書かせるのではなく、一つ一つの数の意味や処理の意味を併せて書いたり、対話したりする活動を充実させる。

第３学年…図形を実際に操作したり、かいたりする活動を取り入れながら、図形の性質や特徴を言葉で説明する学習を充実させる。また、朝学習の時間や授業時間の中で、既習事項の復習を繰り返し行い、基礎的・基本的な内容の定着を図る。

第４学年…図形をじっくり観察し、気付いたことや発見したきまりなどを書いたり対話したりする活動を充実させる。また、わり算の文章題において、答えや余りの数値の意味を考え、書いたり対話したりする活動を充実させる。

第５学年…身近にあるものを既習の図形と結び付けて捉えたり、１辺の長さに着目し、概測した値から面積を求めたりする活動を充実させ、量の感覚を育てる。また、朝学習の時間や授業時間において、図形の作図の習熟を図る活動を設定する。

第６学年…データの活用の学習において、グラフの作成技能の習得だけでなく、データから導き出した結論が妥当かどうかを批判的に考察する活動を充実させる。

令和８年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（理科）

１　理科の定着状況についての概要

第４学年の基礎問題の正答率は目標値と同程度だったが、活用問題は多くの項目で目標値及び区平均を下回った。第５学年は昨年度の目標として挙げた、正答率の目標値越えをほぼ全項目で達成できた。第６学年は問題形式・出題領域を問わず、全項目で区平均を上回った。

２　具体的な課題

第４学年…基礎問題及び活用問題が目標値・区平均をわずかに下回ったこと。「植物の育つ順番」「環境と生物の関係」「太陽の位置と影」「ゴムの伸びと車の動く距離」「磁石に付けた鉄が磁気を帯びる」問題については、大きく目標値を下回ったこと。
また、記述問題の無回答率が区平均より高かったことが課題である。

第５学年…「自然の中の水」の水蒸気に関する問題のみ目標値を下回ったこと。無回答率は区平均を下回ったが、水蒸気の変化に関する記述問題の無回答率が高かったことが課題である。

第６学年…全ての問題で目標値を上回ったが、実験結果と条件の関係を問う問題について他項目に比べ、目標値との差が小さかったこと。また、区平均を下回ったものの、記述問題の無回答率が高かったことが課題である。

３　課題の原因として考えられること

第４学年…基礎問題の正答率は目標値に近いが、応用問題の正答率は目標値より低い。原因と結果の関係を捉えられておらず、文章で説明する力が弱いため、記述形式の問題を始めから諦めてしまう児童が多いこと。

第５学年…第４学年で学ぶ「水蒸気」は空気の次に小学校で出会う「気体」であり、空気との違いを明確に説明できる児童は少ないこと。また、使用教科書に「結露」の記載が無く、現象を理解していても名称を回答できなかったこと。

第６学年…多くの児童が基礎知識を習得しており、根拠をもって論理的に説明する力も向上しているため、記述問題の正答率は昨年度より向上した。しかし、一定数の児童は考えを文章で示すことに課題があり、無回答となったこと。

４　課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

全学年…初出の「理科で使う用語」を扱う際は、全児童にその意味を明確に伝える。
全児童が自分の言葉で考えを説明できるよう、授業の中で繰り返し練習すると共に、良い表現をした児童を見本として根拠のある予想や考察を身に付けさせる。

第４学年…授業で「なぜそうなったか」を問い、原因と結果の関係を意識して指導する。
定期的に既習の内容を確認する機会を設け、予想の根拠として既習の内容を用いると友達が納得する説明ができるという経験を繰り返させる。

令和８年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（英語）第６学年

１　英語の定着状況についての概要

教科の正答率では、全ての項目で目標値に対して同等又はわずかに上回った。全国正答率と校内正答率の対比においては、全ての項目で全国正答率を上回った。JTE と担任との協力体制の下、レッスンプランを綿密に考え、表現活動に取り組めるよう指導を工夫してきたことが、「知識・技能」及び「思考・判断・表現」の結果につながったと考えられる。しかし、「アルファベットの読み」、「アルファベットの聞き」に関しては、区平均と比べ正答率がやや下回った。

２　具体的な課題

・「アルファベットの読み」における（活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を身に付けている：ｚ）において、校内正答率が全国正答率をやや下回ったこと。
・「アルファベットの書き」における（音声を聞き、活字体の小文字を正しく書いている：b）において、校内正答率が全国正答率をやや下回ったこと。
・「英作文」の設問４が、他の設問と比べて無回答率の割合がやや高いこと。

以上が課題である。

３　課題の原因として考えられること

昨年度の調査結果でも課題として上がっていた英作文の無回答率の高さについて、基礎的な単語の意味理解はできているが、英作文を行う活動が少なく、自分で表現する力の定着が不十分であること。

４　課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

・今回の調査結果を JTE に共有し、 児童一人一人が、英語への意欲や必要感をもって学習に取り組めるようレッスンプランを工夫し、学習環境を整える。
・英語科の授業だけでなく、基本的な単語を日常生活の中で使えるよう「魔法の読み書きアプリ」等を活用し、繰り返し定着を図る。
・単元で学習した単語を通年で活用していけるよう、定期的に機会を設定し、意味理解の定着を図る。
・アルファベットを書く機会を増やし、４線上の書く位置や字形など確実な定着を図る。